「東都大学準硬式野球」新人戦 中大初代王者!!

第1回アルシスコーポレーションカレッジベースボールカップ 東都大学準硬式野球 THE ROOKIE TOURNAMENTが6月2日から17日まで、東京・八王子市のダイワハウススタジアム八王子で行われた。東都大学準硬式野球連盟に加盟する今年の春季リーグ1、2部校の1、2年生が出場。決勝は中大（1部）と青学大（2部）で争われ、中大が10―4で打ち勝って初優勝。"兄弟V"を果たした。大会MVPは山口雄大（2年＝佐賀商）が獲得した。

林部好投!!山口雄MVP

名門の意地だ 2部には負けん

最後の打者を空振りの三振に仕留めた瞬間、中大の左腕・林部庄吾（1年＝上田西）は左こぶしを握りしめた。「自分の投球をしようと心がけました」。今大会3試合目で、この試合は6回から登板。キレのある直球、スライダーを軸に追い上げてくる青学大の反撃を1点に抑え、初Vに貢献した。

1部、2部が参加した連盟初の新人戦。春のリーグ戦で3季ぶり62度目の優勝を果たした名門が2部のチームに負けるわけにはいかなかった。初戦で亜大、準決勝で国学院大、決勝では青学大と2部校を撃破しての制覇。池田走コーチは「1部、2部というのは関係なし。みんな力があるし、体も大きい。2部だから、というイメージはありません」と、決して簡単な戦いでなかったと振り返る。全11試合中3試合で2部校が1部校に勝利。連盟のレベルの高さを示していた。

先制の適時三塁打を放つなど2安打2打点と活躍し、MVPを受賞した山口雄は主将としてチームをまとめた。「フライを上げず、低い打球を打つよう徹底しました。リーグ戦でも大量点のあとの1点が大切だと池田（浩二）から言われていましたから」。リーグ戦ではまだレギュラーといかないが、ベンチでしっかり準備。その成果をしっかり生かした。

中大（1部）
青学大（2部）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
中大	3	0	0	1	1	3	1			10
青学大	0	0	0	2	1	0	0			4

■山口雄（中）■山本、小河原（以上中）友清（青）

キレのある直球で好投した中大・林部

春季リーグ戦制覇の"兄"に続いた

チーム全体の底上げになる

出場機会が少ない下級生が躍動した今大会。「1、2年生が頑張ればチームの底上げにもなりますし、いい大会でした」と池田コーチ。リーグ戦のレギュラーもいるとはいえ、多くの選手は試合出場の機会が少ない。高校では外野手だった林部は、大学で投手にも挑戦。新人戦での登板は貴重な経験となった。「やりがいもありますし、全日本へのアピールにもなります」と声を弾ませた。山口雄は「試合での1打席がために なる。いい経験になりました」。優勝と同じくらい、試合に出てプレーできる喜びをかみしめていた。

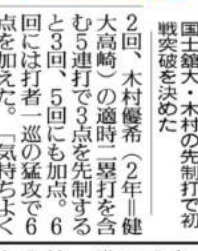
1回戦大勝!!

専大 初戦の1回戦で日体大に大勝。3回、須永隼人（2年＝専大松戸）の適時二塁打などで3点を先制すると、終盤も好機を確実にものにして試合を優位に進めた。「ゼロが続いていた状況で、先制打が打ててよかったです」と須永。準々決勝は国学院大に惜敗し、4強進出はならなかった。

日体大との試合で先制打を放った専大・須永

打ち勝ち突破

国士舘大 法大Ⅱ部に打ち勝って初戦を突破した。



国士舘大・木村の先制打で初戦突破を決めた

9回サヨナラ 徳永が殊勲打

国学院大 準々決勝で劇的なサヨナラ勝ちを収めた。4点を追う9回、平野潤（2年＝二松学舎大付）の2点二塁打で1点差とすると敵失でさらに1点を加え、1死満塁で徳永椋（1年＝国学院栃木）が2点適時打を放ってサヨナラ勝ちした。「先輩方が声をかけてくれて、期待に応えられてよかったです」と徳永は喜んだ。

専大との2回戦でサヨナラ打を放った国学院大・徳永

無念引き分け 準決勝敗退……

日大 準々決勝の国士舘大戦で延長11回の末にサヨナラ勝ち。9回までに決着がつかず、10回から今大会初のタイブレイク（1死満塁）から導入され、11回に市毛聡一（2年＝郁文館）が適時内野安打を放って試合を決めた。市毛は「優勝するまで喜べません。明日も勝ちます」と気合を入れていたが、準決勝は青学大と7―7の引き分け。大会規定で惜しくも決勝進出を逃した。

チームの勝利に貢献した日大・木上（左）と石田

初戦山田好投

亜大 初戦の1回戦で1部の東海大に快勝した。初回、久保田佳緯（1年＝富士学苑）の適時二塁打で先制すると、2回には太田陽也（2年＝広陵）の適時打で2点を追加。投げては先発の山田優真（2年＝明和県央）が相手打線を5回まで無安打無失点に抑える好投をみせた。「味方がよく打ってくれました。感謝です」と山田。準々決勝では中大に敗れたが、意地を見せた。

開幕戦で5回無安打無失点の好投をみせた亜大・山田

青学大 収穫の準V

▶▶ チームを引っ張った青学大・石野田主将

スコアだけなら大敗かもしれないが、チャンスはあった。「試合前は大差で負けると思っていましたが、序盤はそんなに点を取られていなかったので、うまくはまれば勝てるかも…」と青学大の石野田颯馬（2年＝青山学院）は悔しがった。

初回こそ先発の菅谷祐太（1年＝国学院久我山）が立ち上がりをとらえられ3点を失うも、2回からの3イニングは無失点。4回には無死満塁の好機から遊ゴロ併殺打の間に1点を返すと、塚本慎一郎（2年＝土浦二）の中前適時打で1点差に迫ったが、終盤に失点を重ねて引き離された。「強かったです」と石野田は1部優勝校の底力を痛感していた。

初戦で東洋大を10―4で破ると、準々決勝で駒大に打ち勝ち、準決勝では日大と引き分けたものの規定で決勝進出。「普段出られない選手が多く出られてよかったです。入学して間もない1年生がチームに溶け込み、声も出ていました」と石野田。得たものは大きかった。春のリーグ戦は3位も石野田をはじめ経験者は多い。「2部優勝、1部昇格を目指します」と誓った。

▲▲ 見事優勝を飾った中大ナイン【切り込み写真】中大・山口雄は決勝戦で先制打を放つなど大会MVPを獲得した

3、4年生出場不可

◇第1回アルシスコーポレーションカレッジベースボールカップ 東都大学準硬式野球 THE ROOKIE TOURNAMENT 春季リーグ戦の1部、2部の大学が出場し、トーナメントで優勝を争った。1、2年生に出場資格が与えられる。3、4年生のベンチ入りは可能だが、出場は不可。2時間を過ぎて新しいイニングには入らず、引き分けの場合は2部校の勝利。

中央大学

中央大学	5―1
東海大学	0―4
亜細亜大学	8―1
専修大学	9―1
日本体育大学	5―6
國學院大学	10―4
駒澤大学	5―10
青山学院大学	10―4
東洋大学	7―7
国士舘大学	12―6
法政Ⅱ部	4―5（延長11回）
日本大学	

☆大学規定により青山学院大学対日本大学戦は青山学院大学の勝利

準優勝に輝いた青学大ナイン

第1回アルシスコーポレーションカレッジベースボールカップ 東都大学準硬式野球 THE ROOKIE TOURNAMENTをサポートしてくれたアルシスコーポレーションの佐々木純一社長、平澤商事の平澤彰久社長、東都大学準硬式野球連盟の五味敏雄理事長が準硬式野球の魅力、今大会の開催意義について語り合った。

今大会の意義と魅力語った

平澤商事 平澤彰久社長 ＊ 東都大学準硬式野球連盟 五味敏雄理事長 ＊ アルシスコーポレーション 佐々木純一社長

（左から）平澤社長、五味理事長、佐々木社長は記念撮影に臨んだ

文武両道の生活

平澤 私は野球の経験がないのですが、息子が日大の準硬式野球部でプレーしていて、その応援に行って準硬式野球を知りました。

佐々木 野球の経験は高校3年間だけですが、連盟の杉山理事と知り合ったことが準硬式野球と出会いました。

五味 私は埼玉の市川口（現川口市立）の内野手で、2年春に県でベスト4までいきました。大学でも硬式を続けることを考えましたが、当時はけがをしたら野球だけでなく大学もやめなくてはならない風潮にありました。そんな時、先輩から準硬式というものがあると教えてもらったのです。硬式でも軟式でもない、その間と。4年間準硬式をやってみて、授業にも出席し、体育会としての野球もしっかりやって、文武両道の学生生活を過ごすことができました。

平澤 硬式でやっている知人の応援にも行きましたが、準硬式の選手の方が自主運営に取り組んでいる部分も多いので、本来の学生の野球部の部活動のやり方という印象を受けました。

五味 野球だけをやっていればいいというのではなく、授業との両立を目指しています。4年間単位を取って、かつ野球でも結果を残す。一流選手になれなくても、4年間やってきたことを自信にして社会でもやってほしい。挫折したらすぐやめて離職するのではなく、野球をやっていた時に比べたら、まだまだ耐えられると思ってほしいですね。

佐々木 私は高校での3年間しか野球の経験はありませんが、その時につらいことを乗り越えられたから、社会に出てもいろいろなことで役立っていると思います。野球をやっていたからこそ仲間と助け合うことや、目標に向かって努力していくことを学べたのだと思います。

平澤 私の息子も4年間で非常に大人になったなあという印象があります。それも4年間、準硬式野球で頑張ったから成長できたのだと確信しています。

野球に恩返し

佐々木 準硬式はマイナーではありますが、競技人口は多い。100人選手を抱える部もあります。3、4年生が主体のチームになると1、2年の時に試合に出られないまま卒業してしまう選手も出てきます。そこで、1、2年生が切磋琢磨せっさたくま）できるような目標を与えることができないかと考え、新人戦をサポートしようと考えた次第です。六大学には新人戦があるのに東都にはなかったのは、野球に恩返しがしたいという気持ちもありましたし。

決勝戦では始球式が行われた

下級生に機会を

平澤 これまでの1、2年生は試合経験が少なく、ベンチに入れない選手も出てきます。なぜ練習するのかというお話をいただいて、とてもうれしく思いました。教育リーグ的な新人戦があれば、試合に出られる。現在は2部以上のチームだけですが、3部以下のチームには「2部に上がれば新人戦にも出られる」という目標が出てきます。

佐々木 今回は準備期間が短かったのでできませんでしたが、将来的には3部も加えてやるのもいいのでは。

五味 この新人戦をきっかけに準硬式野球の底辺を広げていきたいですね。1、2年が出られる大会があるのであれば準硬式をやってみようという高校生が出てくるかもしれませんし、野球と授業を両立できるという点もアピールできれば、裾野を広げられますよね。

平澤 出身校の後輩につながっていけば、競技人口も増えていきますし、もっともっと準硬式野球というものを多くの人たちに知ってもらいたいですね。硬式と同じ野球でルールが違うわけではありません。学生野球として4年間、楽しめる学生野球がここにあるとアピールしたいですね。

佐々木 八王子でやっているのですから、少年野球の選手を集めて野球教室を開催するのはどうでしょう。小中学生にも準硬式野球を知ってもらえますし、もったいないしたらそのご保護者が準硬式野球を知ってくれて観戦するようになり、客席にも人が増えていきますよ。

五味 地元の少年野球チーム、教育委員会などとタイアップできればいいですね。球場を使わせていただいているということで、地元少年たちに少しでも還元できればいいですね。

平澤「4年間、楽しめる学生野球がここにあるとアピールしたい」

◇東都大学準硬式野球連盟 1948年に発足。現在は35校が加盟し、1部から6部までに分かれて春、秋のリーグ戦を戦って優勝を争い、各部リーグ戦終了後に入れ替え戦を行う。1部は甲子園経験者も多くハイレベル。16年のドラフトでは帝京大の左腕・鶴田圭祐が楽天から6位指名された。

五味「この新人戦をきっかけに底辺を広げていきたい」

◀◀ 各大学に贈呈された記念Tシャツ

佐々木「仲間と助け合うことや目標に向かって努力していくことを学べた」